

二〇二二年 山口県大会上演

作品名 『スケッチブック (OGびのver.)』

原作者名 渚太陽

脚色者名 ぴの

連絡先 宇部鴻城高等学校

作品介绍

おばあちゃんのスケッチブックに導かれタイムスリップしたのは、昭和二十年?! スケッチブックに込められたそれぞれの思い。繋がる願い…

男 3人 女 6人

紬 (つむぎ)

操 (みさお)

母

良子 (よしこ)

宮子 (みやこ)

千 (せん)

先生

柳田正 (やなぎだ ただし)

父

紬の部屋

曲が流れている

薄暗い部屋の中、たくさんのスケッチブックと

破り捨てられた紙

紬、布団を被り音楽を聴き

描きたいのに描けないもどかしさを抱えながら

自分の描いた絵をみている

ドアの前にやってくる喪服姿の父

手には古びたスケッチブック

父、ドアをノックする

紬、慌てて曲を消す

父

紬、今帰ったよ。ちゃんと飯食ったか？本当に行かなくてよかったのか。最後のお別れだったんだぞ。・・・小さい頃よくばあちゃんと山に行ってき、一緒にいっぱい絵描いてたじゃないか。

紬、布団を頭まで被る

父

・・・そうだ、これ。ばあちゃん家にあつてな。だいぶ昔のみたいなんだけど。ばあちゃんが若い頃に使ってたのかな。結構綺麗に描けてるんだ。・・・ほら、最近なんか絵描くの上手くいつてないみたいだからさ。美大って、その、大変なんだろ？父ちゃん絵の事なんも分かんなくて。その、アドバイスとか出来なくてさ。それでこれ、なんか参考になればなつて持つて帰ってきたんだ。

父 紬

あつち行って！
・・・ここ、置いとくな。

父、肩を落とし去っていく

紬、スケッチブックを手に取ろうとするが
頭の中で声が聞こえてきて耳を塞ぐ

A 君の絵はまるでなっていないな

B 入賞なんて無理無理

C 一からやり直した方がいい

D 画家になるのは諦めた方がいい

E いつも一人だよねえ

F 才能無いんじゃない

紬、スケッチブックをみて、手に取る

紬

もうやめよっかな。

ふと顔を上げ、ドアの方をみる

ドアを開け、父が置いていったスケッチブックを手に取り、部屋に戻る

ボロボロなので慎重に扱う

紬

ごめんねおばあちゃん。約束、守れそうにないや。

スケッチブックを広げみる

紬

・・・綺麗。ここどこだろう？おばあちゃん家の近くかな？

スケッチブックには風景画

一枚の折り畳まれた紙が落ちる

笑顔の女の子の似顔絵

端に名前が書かれている

#竹槍の訓練

女学生たちの声「一・二、一・二」

シルエットの中、竹槍の訓練

紬 女の子？ん？なんか誰かに似てるような・・・柳田？

突然鳴る電話

操 たあー。痛い。(転ぶ)

先生 そこ！たるだどる。気合いを入れる、気合いを！

操 はい！

先生 気を休める暇などないぞ！本土決戦となったその時は、

鬼畜米兵を自らの手で突き伏せてしかるべき！

一同 はい！

先生 構え、始め。

一同 一、二、一、二

先生 もっと腰を低く！そんな突きでは虫一匹も殺せんぞ！

一同 はい！一、二、一、二・・・

先生 やめ！ここで小休止。各自休みなさい。

一同 はい！

紬 ……誰？

画面を見るが見たこと無い番号

不安がりつつも電話に出るが無音

不審に思うが、もう一度耳を近づける

雑音の中、女の子の声が聞こえてくる

電話 ……ついたら……また……ださんと……もう一度……

もう一度一緒に……絵を…

先生、下手へ去っていく

操 あーあ、疲れちゃった。

宮子 本当。腕なんかガクガクしてる。

操 先生なんだか、段々怖くなるね。

突然の光に包まれる紬

暗転

良子

仕方ないよ。戦局はいよいよ本土決戦なんて言ってるんだから。「お前達皇国日本の子女として一億総玉砕の精神で戦え！」だもの。

千

おっかない。

操

戦争なんて早く終わればいいのに。

良子

操そんなこと言うもんじゃないよ。誰かに聞かれてたら「非国民」って言われるよ。

操

だって、戦争が終わればご飯だってきつと、沢山食べられるのって思ってるの。

千

本当操は、食べることばかり。

宮子

食い意地が張ってるからね。操は。

操

何よ。イイじゃない。

良子

でも、私もお腹いっぱい食べたいな。白いご飯。まあ、夢だけどね。

宮子

なんだか、みんながそんな話するから、お腹が減ってきてちやっただじゃない。

千

私もー。

操

あーあ、何で日本は戦争なんかやってるんだろう……。

母、上手からやってくる

母

みんなご苦労様。

操

お母さん！何しに来たの。

母

何しになって近くまで来たもんだから、あんた達の様子でも見ようかなって思ってる。

良子

どうも、お久しぶりです。

母

あれ、良子ちゃんか。久しぶり。

操

もう、お母さん。早く帰ってよ。

宮子

あれ、おばさん何持ってるの？

母

ああ、これかい。今ね、近くの畑で出来た芋を分けてもらって、ふかしてきたところさ。あんた達食べるかい？

千

美味しそう。

宮子

私食べたい。

操

千。宮子。

良子

自分もいいですか？

操

もう、良子まで……。

母

ほら、操何ぼやっとしてるんだい。みんなに、配っておあげ。

操

だって、訓練中だし……。

母

今は休憩中なんだろ。

良子

でも……（グー お腹の鳴る音を千が真似する）

操

あれ？

宮子

あく操、お腹が鳴ってるよ。

母

あらあら。

操

違うよ、今のは千が！

良子
宮子
千

あはははは

操 もう、みんなして笑って。

母 ほら、お前もお腹空いてるんだろ、さあ。

操 …まあ、ちよつとならいいよね。

千 やったー。

宮子 先生もまだ戻ってきそうにないしね。

良子 せつかくだもん、食べようよ！

操 そうだね、食べよ。

歌を歌いながら、みんなで芋を食べる

『夢の中へ』 作詞作曲 渚太陽

晴れ渡る空 何もない空

何もないけど 今は幸せ

あなたの笑顔 あなたの歌を

なにもないけど 今は歌おう

風が吹いて 鳥が歌う

それが私の青春

今は笑顔忘れないで

きつといつか夢の中へ

一同 笑顔

なにかが落ちる音

一同 つきやあ！

宮子 なに、攻撃？

良子 警報は鳴ってなかったわよ！

母 みんな、槍をもちなさい！

操 やだやだ、怖い。

母 操！しっかりなさい！

紬 いったーい(声のみ)

一同 ???

一同警戒しながら探す

紬 ちよつと、ここどこよ。(声のみ)

声の聞こえた方に向かって一斉に槍を向ける女学生達

物陰から出てくる紬

紬 つ！！な、なになに。なんなのよ(両手を上げる)

母 え、女の子？

操 つはあー。

良子 脅かさないでよもう。

宮子と千 あービックリした。

紬 え、なに、ごめんなさい。

母 ちよつとあんた、なんだってそんなところにいるんだい。

紬 え、いや、気がついたら。

操 気がついたらって。

紬 さっきまで部屋で…あれ、なんで？

母 私に聞かれたってわかりやしなわいよ。

紬 スマホが鳴って、なんか声がして、そしたら光がブワあ

ああって。

良子 どういうこと？

宮子 頭打ったんじゃないの。

千 え、大丈夫？！

紬、千と宮子に頭をぐじゃぐじゃにされる

宮子&千 あはははは。

紬 ちよつとやめて、ばさぼさになっちゃう。

宮子 なによ、心配してあげたんですよ。

紬 には扱ひどすぎ。

宮子 それにしても、ここら辺じゃみない顔ね。

千 うん。

良子 そうですね。

母 あなた名前は？学校は？

紬 紬です。学校は…サボリ。

母 まあ。

宮子 サボりって、どんな教育されてんだか。

良子

どこの学校に通われてるのですか？

紬 美術の専門学校。

操 え！美術、ってことは絵を描く学校ってこと。

紬 はい、まあ。

操 そこって、どんな勉強をするの？

紬 どんなって言われても。たくさん絵を描いて〜としか。

操 じゃあ、とっても上手なんでしょうね。

紬 いや、私なんか全然。才能の欠片もないっていうか。落

ちこぼれで。このまま続ける意味あるのかなって。

操 そんな！

宮子 まあ、今じゃどこの学校もろくに勉強なんて出来やしな
いし。

千 今日なんて槍の訓練。

良子 学徒勤労総動員でどこも授業なんてありませんから。そ

れにこんなご時世じゃ、やりたいこともできませんし。

操 ……そう、だよね。

紬、操の顔をまじまじとみて考えている

母 にしてもあなた、なかなか不思議な格好してるわね。

千 変わってる。

宮子 うん、変な服装ね。

良子 新しい国民服かしら？

母 あら、靴もはいてないじゃない。

紬 そういうあなた達も、なにその格好、なにそのパンツ。

操 これはもんぺって言うのよ。知らないの？

宮子 そっちこそ、なにこの紐。

千 みてみて、後ろになんか袋がついてる。

操 あ！これ、防災頭巾がくっついてるんだわ！

良子 機能的ですね。

千 なるほど！こうやって服にくっつけてればいつでも被れるんだ！

宮子 引っ張ってみようかしら。

宮子&千 えい(千がフード被せたと同時に、宮子は紐を引っ張る)

紬 ……。(フードが絞られ間抜けな格好に)

一同 あははははは。

紬 ちよっと、いい加減にしてよね！(女学生から逃げ服装を直す、ポケットのスマホを見つける)

母 ほらほら、あんたたち遊んでないで。そろそろ休憩終わるんじゃないの？

操 あ、いけない。

千 えー。

宮子 もっと休みたーい。

良子 そんなこと言っていないで、ほら行くわよ。おばさんお芋

母 ありがとうございます。

母 いいのよ。訓練がんばってね。

紬 (スマホを操作しながらうろろうろしてる)よかったあ、ここ電波はあるじゃん！あれ？スケッチブックは？

操 スケッチブック？

紬 うん、おばあちゃんのね。なんか女の子の似顔絵が挟んであって、そこに確か柳田って名前が。

操 えっ、柳田さん！

宮子 あっれえー。

良子&千 ヒューヒュー。

宮子 噂はどこまでも飛んでいくものなのね。

良子 あっちを見ては柳田さん。

千 こっちを見ては柳田さん。

宮子 ため息ついては柳田さん。操ったら寝ても覚めても柳田さんのことばかりなんだから。

三人 ねえ。

操 ちよっとみんな何言ってるのよ。

紬 操…(操を見ながら考える)

宮子 私、柳田さんにまた会えるかな？

千 (柳田を装って)ごめんね、待たせちゃって。

宮子 ずっと待ってました。

三人 あーん、柳田さーん。

操 こら、宮子！千！良子ちゃんまで。

紬 あはははは

三人 あー！やっぱりそうだ！あの絵の女の子！それに操って、

おばあちゃんと一緒の名前。えっ！もしかしておばあちゃん！

操 おばあちゃん？

え！え？なんで？！なんでおばあちゃんがいるの？しかも若い！（ほっぺ挟んでグリグリ）

っちよつともう、なにするの。（ほっぺ挟まれ上手くしゃべれない）っもう！お母さん！（母の後ろ隠れるよう逃げる）

お母さんってことは…ひいおばあちゃん！

ちよつとやめとくれよ。まだ孫もいないのに、ひいおばあちゃんだなんて。

お母さん ちよつとやめとくれよ。まだ孫もいないのに、ひいおばあちゃんだなんて。

操 まってまって、どういうこと？若い時のおばあちゃんがいるってことは…ねえ、今って何年の何月？

お母さん 何年って、昭和二十年の三月…

お母さん 昭和？！嘘！

お母さん 嘘言っでどうすんだい。

お母さん あー！わかった、これあれだ。

お母さん ？

タイムスリッパ的な！過去にさかのぼっちゃう系の！ほら、おばあちゃんのスケッチブックみてたら、なんか不思議な光が当たってドーンって！（いやでも待てよ、そんなことは現実ありえない？ならこれは夢？独り言をぶつぶつと）

お母さん あの子ほんとに頭打ったんじゃないの？

千 だね。

お母さん 可哀想に。

お母さん なんか色々考えてたら分かんなくなっちゃった。まいつか。それにしても、若い時のおばあちゃんってこんななんだあ。

操 もう、そのおばあちゃんっていうのやめてくれない。まだ結婚もしてないのに。

警戒警報

お母さん 何？何の音？

お母さん 警戒警報だ！

お母さん 警戒警報発令！皆、防空壕に退避せよ！

お母さん みんな急いで！

お母さん はい。

お母さん 何、警報って…どういうこと？

お母さん なにをボサツとしている！今日本は戦争の真っ只中！そんな気概じゃすぐやられてしまうぞ！

お母さん 戦争！？

お母さん 早く避難するわよ！

お母さん は、はい！

お母さん は、はい！

あ、いや・おいしいナーこんな芋粥食べたことナーい。
おいしいおいしい。(二気にかきこむ)
もう、上手言ったって何にもありませんからね。
芋粥じゃなくて白米が食べたいわ。
また、そんなこと言って。兵隊さんたちは、毎日お国の
ために戦ってるんですからね。贅沢は敵です。
何だかお母さん、先生みたい。
そうかしら。
最近は何訓練も厳しくなって、怒鳴られてばかり。本当あ
の先生おつかない。
あなたがそんな風だから先生も怒りたくないのに怒って
くださるのよ。気合いを入れなさい気合いを。
やだ、お母さん見てたの？
ふふふ、そうね。少し厳しい感じだね。でも、私たち女
もこの国を守っていくという気概だけは持つておかないと
ね。ほら、早く食べちゃいなさい。
はーい。
返事はハッキリ短く。
はい。
ふふふふ。
ふふふふ。
話の途中で悪いんだけど、さっき言ってた柳田さんって
どんな人？

え？どんな人って……。
お母さんも聞いてないね。柳田さんのこと。
あの感じだと恋人？
そ、そんなじゃないわよ！・・・訓練の帰り道にね、
みんなでふざけてたら足をくじいてしまったの。その時側
を通った柳田さんが小川の水に自分の手ぬぐいを濡らして
足を冷やしてくれたの。
へえ。
それはよかったね。
本当、優しい人だった。
操。
何？(ちよっと上の空)
芋がついてるよ。ここ。
あ、うん。
あんた・・・恋してるね。
ヴーごほつごほつ、ちよつと何言い出すのよ。
へえ、柳田さんのことが好きなんだよ。
細まで何言ってるのよ。そんなじゃないわよ。
あーごまかしたって顔が真っ赤だよ。(操の顔を覗き込む)
もう！(フードを被せてヒモを引っ張る)っあはは。
こらこら止めなさいよ。気持ちは分かるけどこんなご時
世なんだから行動だけは凜としてね。わかった。
分かってます。

柳田　こんばんは。こんばんは。(声のみ)

母　はい。誰かしらこんな時間に。

柳　あー、柳田って言います。(声のみ)

操　柳田さん？

母　操、早く。

柳田登場

柳田　こんばんは、初めまして柳田正と言います。

母　まあまあ、いつぞやは操がお世話になったみたいで。

柳田　あ、いえ。

絢　へえ、この人が柳田さん。

操　あの、どうしたんですか？

柳田　実は、この間の件で来たんだ。

母　この間の件？

柳田　はい。僕、独学で絵の勉強をしているんですが、実は操

さんを絵に描きたいとお願ひしていたんです。

母　まあ、操を絵のモデルに！

柳田　はい。操さん、是非描かせてください。お願いします。

今日は陸軍記念日でみんな出払っているので遅くなっても

いいんです。だから…

操　でも、私…

母　いいじゃないの操。柳田さんも頼んでるんだし。

絢　そうだよ！

操　…わかったわ、じゃあ。

柳田　ありがとうございます。

操　行って来ます。(鞆をとる)

柳田　失礼します。

母　行ってらっしゃい。気を付けてね。

絢　あーあ、見せつけてくれちゃって。

母　それにしても柳田さんっていい男だね。おばちゃんも

う少し若かったら…

絢　ちよつと見てくる！

母　あ、こら、やめなさいって…もう。

暗転

#星降る夜

柳田　こっちこっち。

操　そんなに急がなくても…

柳田、座る所を探す

柳田　えーと、あつ、ここがいい。ここに座って。

操　あ…でも、やっぱり恥ずかしいな。

柳田　恥ずかしがること無いよ。

操 それにもう夜で暗いから、あまり顔とか見えないと思うし。

柳田 ううん、星の明かりで十分だよ。それに見えないくらいが丁度いいし……

操 どうして？

柳田 だって、昼間だったら、あんまり君の笑顔がまぶしくてさ……見つめていられないかも知れないだろ。

操 えっ？

柳田 ……冗談。あつははは。

操 まあ、ひどい。人をからかって。

柳田 ごめん、ごめん。

操 もう……

柳田 さあいいから、いいから。そこに座って。

操 ……でも。

柳田 ほら、早く早く。

操 ええ。

柳田、絵を描く準備をする

紬、物陰から二人を見つめる

紬 あ、いたいた。

紬、物陰に隠れ二人をみている

柳田 僕ね、この戦争が終わったら画家になろうと思ってるんだ。小さい頃からの夢……おかしいでしょ。

操 そんな、おかしいだなんて。素敵な夢です。

柳田 そう言ってもらえると嬉しいな、ありがとう。今は美術学校に通うために必死に勉強中なんだ。このスケッチもその一環。同期からは「こんな時期になにを呑気に」って言われるけどね。

操 わ、私も。実は絵を描いていて。

柳田 え！ホントに。

操 って言っても、全然上手じゃなくて。

柳田 そんなこと言ったら僕だってまだまだだよ。どんな絵描いてるの？

操 そんな、人様に見せるようなものじゃ。

柳田 気になるなあ。操さんの絵。

操 ……笑いませんか？

柳田 笑うだなんてそんな。

操 じゃあ、少しだけ。

柳田 ありがとうございます。

操、鞆からスケッチブックを出す

紬 あ、あれって。

操 はい、どうぞ。

柳田 はい、拝見させていただきます。

柳田、ゆつくりとページをめくりながら見る

操 ど、どうですか？(恥ずかしがる)

柳田 すごく、すごく上手。

操 そんな、お世辞はいいですよ。

柳田 お世辞じゃなくて、本当に。僕より上手だよ！

操 ありがとうございます。(照)

柳田 この絵はどこ？

操 これは、家の近くで。ここからの夕日がすごく綺麗なんです。

柳田 ここは？

操 ここは、学校の裏山からみた、私が住んでる町を描きました。あ、これは。ここからの風景です！今は真っ暗だけど、朝に見るとすごく空気が澄んでいて。春は少し霞がかかってるんですけど、それがものすごく幻想的なんです！

柳田 あ、ここって初めて操さんと出会った場所。

操 うん、そう。いつかこの町が戦争で壊されてしまうかもしれない。だから残したいんです。私が生きたこの場所を。

柳田 素敵だね。

柳田、操の顔を見る

操、照れる

操 も、もうこれで！

操、スケッチブックを取る

柳田 あ。

操 柳田さんのも見せてください！

柳田 僕の？

操 私の絵見たんだもの、柳田さんのも見せてください！

柳田 操さんの絵の後だとなあ。きつとがっかりするよ。そんなの見なきやわかんないじゃないですか。

柳田、照れくさそうにスケッチブックを渡す

柳田 はい、どうぞ。

操 はい、拝見させていただきます。

柳田 お手柔らかに。

操 わあ。人物画ですか。

柳田 うん。僕、人の表情を描くのが好きでね。特に笑った顔が好きなんだ。

操 へ、へえ(照)

柳田 こんな時代だけど、どんな人でも笑ってる顔を見ると、
なんだか安心するんだ。

操 安心？

柳田 うん。実は笑顔って、人間しか出来ない表情なんだよ。

操 え、そうなんですか！

柳田 人間だけがもつ表情。犬や猫なんかは笑ってるように見えることあるだろ、でもそれはただ筋肉がそう動いてるだけで、笑おうとして笑ってるわけではないんだ。

操 そうだったのね。

柳田 笑う門には福来たるってね。こうやってたくさん笑顔を描き集めたら、幸せになれるかなって。

操 描き集める。

柳田 僕の周りにいる人だけでも笑って生きてほしい。その
笑顔を、その瞬間を描き留めたいんだ。亡くなったとして
も、このスケッチブックの中でその人の幸せが生き続ける
ように。

操 ……。

柳田 なんてね。本当はただ僕が幸せになりたいだけなのかも。

操 ……笑顔…あの。

柳田 ん？

操 描いてくれませんか。

柳田 え？

操 私の笑顔で柳田さんに幸せが訪れるなら、私いつでもモ

デルになります。私の笑顔、描いてくれませんか。

柳田 操さん…僕にもこの町の景色、描いてくれませんか。操
さんと見たこの風景を忘れないために。

見つめ合う二人

操 ふふ。

柳田 操さんのその笑顔、僕に描かせてください。

操 は、はい。(照)

紬 へえ。良い雰囲気じゃん。

操、風景を描く

柳田、風景を描いてる操の顔を描く

柳田 そういえばさっきの子。

操 え、あの子？

柳田 変わった服装してたね。

操 あの服すごいよ！防災頭巾が服と一緒にあって、
ここにある紐を引っ張るとね、ツキユってしぼむのよ！

柳田 ……。

操 ……どうしたの？

柳田 いや、何でもないよ。ただ、僕の弟に似た笑顔して
いてね。こう、笑った時にクシャっとなるあの感じ。

操 弟さんいらしたの？

柳田 うん、栄養失調で亡くしたんだ。小さい時にね。

操 そう……ごめんなさい。

柳田 ……仕方ないよ。そういう時代なんだ。

操 でも………。

柳田 あのさ、冬の星座って綺麗だと思わない。

操 え？……本当綺麗だわ。素敵な星空ね。

柳田 ねえ、双子座って知ってる？

操 ええ知ってるわ。でもどこにあるのかは分からないわ。

柳田 オリオン座って分かる？

操 えーと、あの星が三つ一列に並んでる星座よね。

柳田 そう。そのオリオン座の青白く光る「リゲル」と赤く見

える「ベテルギウス」を真っ直ぐ結んで左上の方に行くと

左右対称の双子座があるんだ。ほら。

操 え？……どれ？

柳田 ほら、あの星と青の星をこうやって結んで……

操 あ、あれね。うん。わかった。

柳田 双子座の兄弟には、カストルとポルックスって言う名前があるんだ。従兄弟との戦いにより兄のカストルを失ったポルックスは、父親のゼウスに兄と一緒にいられるように頼んだんだ。心をうたれたゼウスは、世界中のすべての兄弟姉妹たちが、2人を手本に仲良くなるよう願いを込めて、二人を夜空に上げて星座にしたんだって。

操 悲しいけど素敵な話ね。

柳田 でね、実際には兄のカストルよりも弟のポルックスの方が一等星とって明るく輝いているんだ。兄よりも弟の方が輝いてるなんて……何だか不思議だね……もしかして僕の弟も生きていたら、僕よりも輝いて絵を描いたり来たんだろうな……

操 もしかしたら、柳田さんよりも絵が上手かったりして。

柳田 あっ、言ったなあ。

二人楽しそうに笑い合う

柳田 何だかこうしていると、日本が今戦争していることなん

か忘れちゃいそうだよ。

操 本当ね。ずーっと昔からこうしていたみたい。

柳田 いま目になっているあの星たちの輝きは、ずっと昔に輝い

た光が長い時間をかけて僕たちに見えているんだ。

操 長い長い時間よね……

柳田 星はね、人間たちが醜く争ってきた歴史の中で、ずっと昔から変わらずに輝いているんだ。弟も今、きつと星にな

って、僕たちを見ているんだろうな……

操 そうね……きつと柳田さんを見守ってくれているわ。

二人笑顔で絵を描いている

柳田 出来た！

操 え、もう？見せて見せて。

柳田 うんいいよ。

柳田、操にスケッチブックを渡す

操 まあ、私……こんなに綺麗じゃないわ……

柳田 何言ってるんだよ。実物の方がもっと綺麗だよ。

操 え？何よ、また冗談のつもり。

柳田 違うよ。あの……その、本当にそう思ってるんだ。

操 ……うれしい。

二人沈黙

柳田 操さん！

操 はい。

柳田 あの、僕……

操 はい……

紬、二人に近づき、スケッチブックをのぞき込む

紬 本当上手いなあ。

二人

え？！

操 紬、何してるの！

紬 いや、気になってついて来ちゃった。

操 じゃあ、ずっと見たの？

紬 ……まあね。

柳田 ひどいじゃないか盗み見するなんて。

操 そうよ。

柳田 まったく、もう……（照れて困った様子）

紬 ごめんなさい。お二人のお邪魔でしたね。

柳田 何を言ってるんだ。そんなじゃないよ。

操 そ、そうよ。

柳田さんも、操おばあちゃんのこと好きなんだね。

紬 え、おばあちゃん？

操 もう、なに言ってるの。

紬 あ、ごめんごめん。

柳田 それに、す、好きだなんて、柳田さんに失礼でしょ。

操 そんなことないよ。

紬 え？

柳田 君今、柳田さんも……って言ったよね。

紬 うん。（ニヤニヤ）

操 あ……

柳田 ……操さん。

操 柳田さん……私……

紬　ゴホン。あのう…私、居るんですけど……。

操　あ、……ごめんなさい。

柳田　いや、その……

慌てて離れる二人

紬　あ、そうだ。良いこと思いついた。(スマホを取り出す)

ちよつと、そこに並んで。

二人　？

紬　ほら、早く。

柳田　どうして並ぶんだい？

紬　いいから、いいから。

紬、操と柳田を隣り合わせる

紬　もつとくつついて。ほら、下向かないでよ。

柳田　つつよつと。

操　もう、さつきから何なの。

紬　そうそう、そんな感じ。じゃあ、ここの部分をよく見てね。

柳田　え、なんだそれ？

操　あ、私たちが写ってる！

紬　はいはい、動かないで。じゃあ、笑って、ハイチーズ！

二人　？？？

紬　星の明かりにしたら結構よく撮れた。ほら見て。

操　写真だわ！柳田さんが写ってる。

柳田　本当、操さんも綺麗に……

紬　うん、綺麗だねえ。(柳田をからかうように)

操　すごいわね、こんなに小さな写真機見たことないわ。

柳田　どんな仕組みなんだろう。ちよつと見せてくれないか？

紬　いいよ。

柳田にスマホを渡す

画面をさわっていると写真がスライドされ、紬の絵が出てくる

柳田　これは君が描いたのかい！

紬　っえ、あ、それは。

操　そういえば、美術の学校行ってるって。

柳田　そうなのかい！

紬　いや、そんな驚くことじゃ。

操　見せて見せて。

操、スマホを取る

操　わあすごい！たくさん色があるわ！綺麗。

柳田　君の通う美術の学校っていったいどんな感じなんだい？

柳田 っえ、どんなつて言われても。

柳田 すごく色鮮やかだった、あの色はどうやって出すの？

柳田 出すっていうか、あれは、アクリル絵の具を使って。

柳田 アクリル？

柳田 あ、もうその辺で。

柳田 もうちよつといいじゃない！っあ。(スマホを取られる)

柳田 はい、終了。

柳田 ああ、もつと見たかった。あんな素敵な絵、私初めてみ

柳田 たわ。なんだか心がフワフワしてる。

柳田 線も細かくて、繊細で。

柳田 そんなことないよ。教室内じゃ一番下手くそ。

柳田 うそ！今の絵が一番下手だなんて。だったら私の絵なん

柳田 かもつと下手っぴだわ。

柳田 それを言うなら僕の絵だつて！

柳田 いやいや、それはないつて。私のなんかより二人の方が

柳田 よっぽど上手だよ。

柳田 いつも白黒の絵ばかりだから、あんなにたくさんの色が

柳田 あるなんて私知らなかった。

柳田 そうだね。

柳田 あの幻想的な絵は、どうやって描いてるの？

柳田 どうやってつて、えつとそうだな。私、絵を描く時は基

柳田 本音楽かけてるんだ。

柳田 音楽？

柳田 うん。こうさ、ずっと集中していると、雑音つて言うか、

柳田 嫌なことばかり思い出しちゃうんだよね。でもさ、音楽

柳田 聞いていると、嫌なことが消えて頭ん中が空っぽになのん。

柳田 そしたらブワつとね、たくさんの線や色が浮かんでくる

柳田 んだ。

柳田 線？色？！

柳田 そう。線を繋げて、色を重ねて、紡ぎ合わせていくの。

柳田 無心に、ただひたすらに。でも、先生にはそれじゃダメつ

柳田 て言われるんだ。

柳田 どうして？

柳田 それは・・・君の描いた絵はただ隙間を無理矢理うめて

柳田 るだけだ。自分の心が満たされてないから、そんなつまら

柳田 ないモノしか描けないんだ！・・・つて。他の皆はもつと

柳田 印象的で独創的で衝動的で。世界に通用するレベル。私の

柳田 は何回応募しても入賞すら出来ない。

柳田 そんな。こんなに心が暖まるのに。

柳田 画家になるなんて夢のまた夢。もうやめちゃおっかなつ

柳田 て。私の絵なんて誰も見てくれない。誰も望んでない。誰も

柳田 求めてない。それに賞が取れないんじゃないや意味ない。

柳田 それは違うよ。

柳田 え。

柳田 君の絵は僕たちに新しい世界を見せてくれた。そりや苦

柳田 しい時もあるさ。でも・・・れでも描き続けられる。それつて

きつとすぐく幸せなことなんだ。

紬 そうかもしれない、けどそれは……

柳田 賞なんかとれなくなっちゃっていいじゃないか。僕は誰もが幸

せになる絵を描きたいと思ってる。見た人が自然と笑顔になるような。……そういう画家になりたいんだ。

操 ねえ、ひとつ提案いいかしら。

紬 ？

操 せつかくなら三人で一つの作品、描いてみない。

紬 え？

柳田 いいねそれ！

操 ね！

紬 ちよつとまって。なんでそんなこと。

操 私思ったの。絵っていうのは、一人で描かなきゃいけないってわけじゃないじゃない。

紬 それは、まあ。

操 私、柳田さん、そして紬。三人それぞれの線が重なって

新しい今までにないものが生み出されると思うの。

柳田 思い浮かんだその色や線は、きつとその人が今まで生きてきた中で感情が現れる。誰にも決して真似できなし、決して比べられるものじゃない。

操 そうよ。あんなに素敵な絵を描く紬なんだもの。やめるなんてもったいない。続けるべきよ！賞なんか取らなくなっちゃって……

紬 でも評価されなきゃ、認められなきゃ。

操 ……だったら私があげるわ！そうね、頑張ってるで賞、なんてどう？

柳田 ははっ、いいね。なら僕は、君の絵は幸せを運ぶで賞。

操 初めての感動を与えてくれたで賞。

操・柳田、いろんな賞を言っていく

紬 ……ふふ、なにそれ。どんだけ賞くれんの。

柳田 やっと笑ってくれた。

紬 あ。

操 ほら、一緒に描きましょう！

紬、背を向ける

操、肩を落とすが柳田が励まし、二人で絵を描きだす

紬、二人を気にしてチラチラとみている

操と目が合い、操に手を引かれ二人の間に座る

鉛筆を持ち、二人に見守られながら描く

操・柳田、紬が楽しそうに描いてる姿をみて微笑み合い、三人一緒に描く

時に笑い、夢中になって三人が絵を描き続ける

糸 すごい。私だけじゃこんなに力強い絵描けないよ。

柳田 人物画が多かったけど、こんな風に描くのも悪くないな。

操 皆で一つの絵を描くなんて初めて。それに、誰かと一緒

ってすつごく楽しいのね。

糸 なんか久々かも、絵を描いてて心が満たされてく感じ。

私一人じゃ描けなかった、二人のお陰。自信がもてた。

操 三人で描いた初めての作品ね。

糸 うん。一人で閉じ籠ってたら、こんなにいい絵は描けな

かった。

柳田 ああ、本当に。目の前に人はいても、描くのは一人だっ

たから。もつと前からこうやって描けばよかったな……

操 柳田さん？

柳田 ……僕ね、入隊するんだ。

操 え？

糸 入隊？

柳田 うん。…召集令状がきたんだ。

操 ……そんな。

柳田 わがままを言えるならここに残りたい。この手で人の心

にずっと残るような作品を描き続けたい。

操 だったら。

柳田 でも、男はやっぱり戦地に行かなくちゃいけないと思う

んだ。それに、見事お国のために死んで花を咲かせたら、

弟と一緒に双子座になれるかもしれないしね。

操 いやよ。

柳田 えっ？

操 そんなのいやよ。

柳田 ……君だって知ってるだろ。年末から空襲が続いて、ここ

らだっっていつ攻撃されるか分からないんだ。そんなことに

なっって、もし操さんや操さんのお母さんが死ぬようなこと

になったら、僕は……

操 でも……

柳田 母さんもね、お腹をすかせている僕にいつも食べ物に分

けてくれて。自分が栄養失調で死んじゃったんだ。きつと

弟を栄養失調でなくしたから、僕にはそうなって欲しくな

かったんだと思う。母さんはね、僕を守るために死んだ……

だから今度は僕が、命をかけて、操さんや操さんのお母さ

んを守る番なんだ。

操 そんなの……柳田さんのお母さまがのぞまれてる事じゃ

ないわ。

柳田 仕方ないじゃないか、それが戦争なんだ……

操 ……

柳田 きつとね、母さんも生きていたらお国のために働け！つ

て言ってくれると思うんだ。

操 そうかしら。

柳田 ましてや女だっって内戦に向けて訓練してるんだろ。そし

たら何時どうなるかなんて分からないじゃないか。だから、

僕が行くことによつてみんなを少しでも守ることが出来る
んだったら。

紬 そんなの：：だって、別に他の人でもいいじゃん。なんで

柳田さんの。

柳田 ……。

飛行機の音

紬 なにこの音？

柳田 敵機？

操 だって、警戒警報は解除されたんじや。

柳田 おかしいな？

紬 あれ？あそこ、あの空の辺り。ものすごい数の点が見え

る。：：もしかしてB29！（スマホを操作しだす

操 B29？

爆音

警報が鳴る

柳田 無差別攻撃だ！家の方が心配だ急ごう！

操 ええ。

走り出す二人

紬 あった。これだ！昭和二十年三月十日：：東京大空襲。ア

メリカ軍編隊が首都圏上空に飛来。B29爆撃機325機に
よる爆撃がはじまり、火災の煙は高度1500mの成層圏ま
で達し、秒速25m以上、台風並の暴風が吹き荒れ、その日
東京は、火の海となった：：そんな。

暗転

#空襲

飛行機の音、爆音、警戒警報、燃えさかる炎

走り逃げまどう人々、助けを求める声、息絶える人

混沌とした町中

母、母屋の下敷きに

柳田 大変だ！

操 お母さん！

柳田 おばさん。

操 お母さん！ああ、お母さんが…

柳田 今助けます。

操 お母さん！お母さん！誰か誰かー！お願いします助け

てください。

二人で瓦礫をどかそうとするが全く動かない
男、通りがかる

操　　お願いします。手をかしてください。(土下座しながら)
男　　もう無理だ……諦める。

うなだれる操

母　　操。

操　　お母さん……頑張ってお母さん。

柳田　くそっ！熱い！

操　　来るな！消えて！

母　　ああ……

柳田　畜生！待ってて下さい！お婆さん。

操　　お母さん。

母　　操……逃げて……

操　　何言ってるのお母さん。

柳田　くそ！熱い。火の勢いが止まらない。

母　　ほら、早く。もうすぐここは火の海になる。だから……

ああ……

操　　やだ、お母さん、やだ……死んじゃあ嫌……いやよ。

母　　……何してるの……逃げなさい。

柳田　くそ、熱い。重い……よし、誰か助けを呼んでくる。

母　　柳田さん……待って……

柳田　えっ！？

母　　もう、私は駄目です。早く逃げて下さい。

操　　何、何を言ってるんですか！

柳田　そうよお母さん、あきらめちゃ駄目よ。

母　　早くしないとあなた達まで火に巻き込まれるわ、ゴホッ

柳田　で、でも……

操　　いや。いやよ、お母さん……わたし、ここにいます。

母　　操を連れて逃げなさい。

柳田　いやです……もう大切な人を失うのは嫌です！

母　　それでも日本男児ですか！国のために命を投げ出す、み

くこの民ですか！！

柳田　あなた達一人守れないで、何のための……何のための

戦争ですか！

操　　操をお願いします。だから……早く！

母　　駄目よ。お母さん。

操　　逃げなさい！操まで死なせるつもりですか！

母　　嫌……お母さん。

柳田　……すみません許してください。操さん逃げましょう。

操　　嫌よ！駄目！柳田さん！逃げるなら一人で逃げて！私も

一緒にここにいます。

柳田　駄目です。操さんまで死なせることはできません！

母　　み、操……

柳田 おばさん：操さん、さあ、早く！（操の腕をつかむ）

操 嫌！離して、柳田さん、離して下さい！！

柳田 逃げるんだ！操さん！

操 いやー！っ！お母さん！！

母 操を頼みます。

操 お母さー！っ！

柳田、操をむりやり立たせ逃げる

燃えさかる炎

響く爆音

母、スポット

幼少期操の声「おかあさん」

母 操！どうしたの。また良子ちゃんと喧嘩でもしたのか

い？

赤子の泣き声

母 よしよし、操おなががすいたのかい？ごめんね、お母さ

んのお乳の出が少なくて、そうだ、子守歌を歌ってあげる

よ、操。

ねんねんころりよ おころりよ

ぼうやは良い子だ ねんねしな

ぼうやのおもりは どこへいった

あの山越えて 里へいった

里のみやげに なにもろた

でんでん太鼓に 笙の笛

業火と爆音

暗転

#出征

軍服姿の柳田

見送る操

柳田 じゃあ、いくね。

操 ……くれぐれも、お体には気をつけて。

柳田 操さんも。

操 ええ。

柳田 このスケッチブック、操さんがもっていてくれませんか。

僕だと思って。

操 はい。：私も、ここが柳田さんが帰ってくる場所です。

操、町の絵を渡す

柳田、絵を見つめ大切にしよう

柳田 (敬礼)柳田正。この命お国のために、天皇陛下のために、
そして…操さんのために捧げます。

操 生きて…生きて帰ってきて下さい。(柳田の手をとり)こ
の手でもう一度、もう一度一緒に絵を描きましょう。あの
丘の上で、一緒に。
柳田 必ず…必ず。

♪汽笛

柳田 …では、行って参ります。

操 柳田正、万歳！万歳！

柳田、去る

操、スポット

操 万歳！万歳…どうして…何のために…お母さん…何
のための戦争ですか？(操のスケッチブックを見つめて)柳田さ
ん…人の夢まで奪ってしまって、私はどうすれば…死なないで柳
田さん。生きて、生きて帰ってきて…もう一度夢を語りましょう…
ああ、晴れ渡る空…何も無い空…何も無いけど…今は、笑顔忘れ
ないで…きつとつか夢の中へ…

暗転

紬の背景には戦時中の映像
紬、スポット

この後、名古屋、大阪、そして再び東京と、空襲が続き、
8月には広島、長崎へ原爆が投下され、日本の無条件降伏
で戦争が終わった。戦争は、何もかも奪ってしまう…
大切な人、幸せな時、未来も夢も…

♪玉音放送

暗転

#紬の部屋

紬、目が覚める

紬 ……あれ？

紬、起き上がる

手にあたる古いスケッチブック

夢？…あ、草履。つてことは。(スマホを操作し、三人
の写真を見つける)…夢じゃない。

紬、スケッチブックを手にとり三人で描いたページを見る

紬 ……おばあちゃん、柳田さん。

父、おにぎりをもってくる
ドアをノック

父 紬。ご飯食べてなかったみたいだからつくったぞ。紬？
ほら、あんまり根詰めるとよくないって言うし。食べないか？

父、返事がなく落ち込む、部屋の前に座る

父 ……ごめんな。母さんが出ていってから仕事が忙しくな
て、お前の話聞いてやれてなかったよな…。前にな、
お前が絵描きになるって夢、ばあちゃんに話したらさあ、
すごい喜んでてな。ばあちゃんの初恋の人とおんなじ夢な
んだって。恥ずかしそうにしながら話してくれたんだ。本
人に言うのと気負いするだろうからって俺に。そのスケッチ
ブックに挟んであった絵。その人が描いたものなんだって。

紬、ドアを開け出てくる。父のとなりに座る

父 紬。

父 紬 ……ねえ、お父さん。なんでおばあちゃん画家になら
なかったの？こんなに綺麗な絵を描くの。
ん、学校に行くのも、画材を買うのも、あの時代はそ
う簡単なものじゃなかったんだ。今みたいに欲しい物がす
ぐ手に入る時代じゃなかったしな。夢をもつていても時代
がそれを許してくれなかった。でもな、ばあちゃん絵を描
くのだけは続けててな…。

父 父、そんな。あれ、今まで風景だったのに、今度は笑
顔の人ばかり。

父 ああ、これこれ。ばあちゃんな、笑顔をいっぱい描き留
めておくんやうって言って、ずっと描いてたんだ。どんな
に辛かったって、笑顔を描き集めたら幸せが訪れるんだと。

父 ……描き集める。
父ちゃんな、お前が夢に向かって頑張ってる姿見ると、
弱音はいてらんないなって思うんだ。紬は、父ちゃんの元
気の源だ。

父、紬の頭を撫でる
紬、照れくさそうにする

父 紬 ……お父さん。
ん？

父 昔おばあちゃんと一緒に行ってた山、連れてってくん

い。

父 ……ああ、いいぞ。

紬 それとさ…一緒に描かない？

父 え、父ちゃん下手っぴだぞ。

紬 下手っぴ…っふふ。一緒だ

父 ？

紬 下手でもいいの。お父さんと一緒に描きたいんだ。

父 ……わかった！あ、でも待ってくれ。この服装じゃ。

紬 早く着替えてきて！

父 え、あ。(立たされる父)

紬 ほら早く！(父を押し出す)

紬、父の不恰好なおにぎりを手にとり嬉しそうに部屋に戻る

丘の上、シルエット

柳田、一人座っている

操、誰かを探しにやってくる

柳田、操を見つけ手を振る、振り返す操

二人ならんで座り、楽しそうに絵を描く

紬、おばあちゃんと自分のスケッチブックを掲げる

紬 おばあちゃん、柳田さん。私、二人に恥ずかしくないぐ

らい立派な画家になってみせるから！

操・柳田、紬の声が聞こえたみたいに振り返る

二人見つめ合い微笑み合う

三人同じ方向を向いている

その表情には笑顔が溢れている

幕